

英語諺と中国故事との比較*

倉島史憲**

(1)

その国、その国には独自の生活と文化があり、それなりに故事や諺が存在する。例えば、諺の面を眺めると、日本の「悪銭身につかず」は、中国では、「苦しんで得た金は万万年、だまして取った金は湯をかけた雪」(苦的錢万万年，騙的錢湯泡雪)⁽¹⁾、英米では、“Ill-gotten goods seldom prosper.”⁽²⁾ (不正に得た財産は栄えない)、ドイツでは、“Unrecht Gut gedeihet nicht.” (不正に得た財産は栄えない)、フランスでは、“Bien mal acquis ne profite Jamais.” (不正に得た財産は利益をもたらさない)、スペインでは、“Bien mal adquirido a nadie ha enriquecido.” (不正に得た利益はだれにも栄えたためしが無い)。また日本の「蛙の子は蛙」は、中国では、「大工の子は柱を切るのが上手」(木匠的孩子会砍柱子)⁽³⁾、英米では、“He that comes of a hen must scrape.” (めんどりの子は足で掻く)、ドイツでは、“Was von der Henne kommt, das gackert.” (めんどりの子はクックッと鳴く)、フランスでは、“Qui naît de poule aime à gratter.” (めんどりの子は足で掻くのが好きである)、イタリアでは、“Chi di gallina nasce, convien che raspi.” (めんどりはけずる道具に匹敵する)。日本の「溺れる者わらをつかむ」は、中国では、「水に落ちたから泡でもつかむ」(落水擒水泡)⁽⁴⁾、英米では、“A drowning man will catch at a straw.” (溺れれかかっている人はわらをつかもうとする)とか、“Any port in a storm.” (嵐の中でどんな港もたより)、ドイツでは、“Ertrinkende halt sich an einem Strohholm.” (溺れかかっている人はわらをつかもうとする)。フランスでは、“Un noyé s' accroche à un brin de paille.” (溺れかかっている人はわらをつかもうとする)、イタリアでは、“Chi sta per affogare si attacca anche ad un filo di paglia.” (溺れかかっている人はわらをつかもうとする)。このように、同じ精神の諺までそれぞれの国に存在するのである。故事にしても洋の東西間わずある。例えば、日本には、「当って砕けよ」、「過の功名」、「親に先立つは不孝」、「後生大事」等あり、中国には、「鍼氈に座す」、「四面楚歌」、「五車の書」とか「璧を返す」と数も多く、西洋には、ギリシア神話に出てくるトロイの木馬の話に由来する“The Trojans were wise too late.”⁽⁵⁾ (悟るのが遅すぎた)や“We Trojans were.”⁽⁶⁾ (我々の栄光はもうない)、René Descartes (1596-1650), の言う“I think, therefore I am.” (我思う故に我あり)。Abraham Lincoln (1809-1865), の Gettysburg で行った演説の中の一節にある“Government of the people, by the people and for the people.”⁽⁷⁾ (人民の、人民による、人民のための政治)等数知れずある。

* 中部地区英語教育学会において発表

** 一般科 英語 講師

原稿受付 昭和58年9月30日

これらが、余りにもよく似ているために、諺なのか、故事なのか、あるいは名言なのか区別し難いことがあるのは、次に述べるこれらの特徴からして、それぞれの間に一線を画すことの容易でないことも分かるのである。

故事は、1. 書物の中に見出される。2. 昔あった事実、事柄である。3. 内容的に印象的である。4. その国の人の思考によって生れたもの。5. 貴族や為政者、知識人の知識であった。6. 温故知新、即ち故きを温ねて新しきを知り、生活の参考になる。

また、諺は、1. 民衆の生活体験から生れた生活の知恵を示す。2. 道徳が織り込まれていて教訓的である。3. 古くから口碑によっている。4. 口調がよく韻律文体である。(古い諺ほどこの傾向が強い) 5. 表現力が強く、簡潔である。6. 民衆の心にすばやく入りこみ、永続的にきざまれる。7. どの国にもあって、人間性の同じことを示している。8. 民衆の不文律である。といった点が挙げられよう。

こうした特色を踏まえて見ると、諺が、“Brevity is the soul of wit.”(簡潔は機知の真髓)を思わせ、印象的であるように、中国故事・成語を採り上げてみても、英語の諺との近似性が認められる。例えば、“Seeing is believing.”がほぼ「百聞は一見に如かず」(百聞不如一见)という成語に相当するように、英語の諺を故事もしくは成語によって簡潔にダイナミックに言換えができないであろうか。更にこの研究が若人の教育の一助となればと願うのである。何故なら諺・故事・成語にしても人間の精神と真髓に迫り心に訴えるものが潜んでいるからである。

その際、それぞれの諺に直訳を付し、その由来も掲げ、類似の諺や故事にも触れることにする。

(2)

1. A burnt child dreads the fire. (火傷した子供は火をこわがる)

ラテン語の ‘*Ignis semel tactus timet ignem postmodo catus.*’ (一度火に触れた猫はやがて火を恐れる) に由来するともいわれるが⁶⁾、ドイツ語には、“*Begossener Hund scheut das Wasser.*” (水をかけられた犬は水を恐れる)、“*Wer sich einmal verbrannt hat, blast hernach die Suppe.*” (一度口をやけどした者はその後スープを吹く)、“*Gebanntes Kind scheut das Feuer.*” (やけどした子供は火を恐れる)があり、フランス語には、“*Chat échaudé craint l’eau froide.*” (熱湯でやけどした猫は水を恐れる)。スペイン語には、“*Gato escaldado del agua fria ha miedo.*” (冷たい水でおじけついた猫は恐れを抱く)、イタリア語には、“*L’uomo scottato ha paura del fuoco.*” (やけどした者は火を恐れる)とか、“*Gattoscottato dall’acqua calda, ha paura della fredda.*” (熱湯でやけどした猫は冷たい水を恐れる)があって、これらの国々には相似の諺があるといえよう。

この諺の精神は、“*Once we have had a bitter experience, we are very careful not to have the same one again.*” (いったん苦い経験をすると、二度としまいと注意するものだ)⁶⁾であり、“*Once bitten, twice shy.*” (一度咬まれると、二度目に用心する)という英語の諺にも通ずる。

この諺は、『楚辞』にある「羹に懲りて膾を吹く」(懲於羹而吹膾(膾))と全く同じ気持を示している。この成語は、一度熱い吸い物で口をやけどした者がそれにこりて次からばか

用心して冷たい肉の膾まで吹いて食べる⁹⁰、ということから来たもので、「羹」は肉や野菜などを熱く煮た汁即ち吸物で、「齏」は「膾」に通じ、細かく切った冷肉料理を指し、「前の失敗にこりてばか用心すること」である。英語にせよ、成語にせよ、共通した精神を示す。

2. A contended mind is a perpetual feast. (満足は永遠のごちそう)

旧約聖書の *Proverbs* xv, 15 に “All the days of the afflicted are evil, but a cheerful heart has a continual feast.” (悩める者の来る日も来る日も不吉であるが、快い心に絶えずごちそうがある) とあるように、“Our greed knows no limits, so we are to content ourselves with what we have now according to our own ability and surroundings.”

(人間の欲望はきりがないので自分の能力や環境に応じて今あるもので満足すべきだ) という精神を示す。また「充分あることを考えると満足する」の意に相当するラテン語の “*Satis quad sufficit.*”⁹¹ に由来する “Enough is as good as a feast.” も同じ気持を示す。他の類似の諺のとして、“More than enough is too much.” (十分以上は多すぎる) とか、“Safety lies in the middle course.” (安全は途中にある) とか、“He is rich that has few wants.”

(欲しい物のない人は富む) 等があるが、中国故事としては、『老子』の「足るを知る者は富む」(知足音富) や「足るを知れば辱められず」(知足不辱) に相当する。前者の成語は、「満足を知っている者は貧しくても心は富者である」、後者は、「満足を知っている者は恥ずかしめを受けて身を誤ることがない」(中古成374) ということである。英語の諺にせよ、成語にせよ、過度の欲、どん欲は禁物と教えている。

3. A friend in need is a friend indeed. (困っている時に助けてくれる友人は本当の友人である)

ラテン語の “*Amicus certus in re incerta cernitur.*” (確実な友は実際の不確実なことにおいて見分けがつく) に由来する。“A friend in need” は、“A friend who helps when one is in need”⁹² のことである。

中国故事としては、『列子』にある「管鮑の交わり」(管鮑交)、『史記』にある「刎頸の交わり」(刎頸之交) 等を思わせる。前者は、春秋時代の斉の管仲と鮑叔牙が幼少のころからたいへん仲がよく、共同の商売をして管仲が欲をかいても、計画に失敗しても、戦いに負けても、老母があつて貧しくても鮑叔牙は人間の運・不運をよく理解し、生涯友情が変らなかつた、ということから「極めて親しい友人関係」(古成129) のことをいう。後者の「刎頸」は、「刎」が「首をはねること」で、「頸」は「首」とか「のど首」のことであり、生死をともし、相手の為にとえ自分の首がはねられようと悔いのない交際のことから「極めて親しい交際」(中古成503) のことである。孟郊⁹³ (751—814) のいう「うわべだけの交際」という意味の「口頭の交わり」(口頭交) では親友はできない。従つて、英語の諺も故事も本当の友人関係の姿を教えているといえよう。

4. A miss is as good as a mile. (少しでもはずれははずれ)

この諺の元は、“An ynche in a misse is as good as an ell.”⁹⁴ (1インチのミスも1エールのミスも同じ) である。言わんとするところは、「人が大きく失敗しても小さく失敗しても、やはり失敗には変りない」⁹⁵ であり、中国の成語としての「大同小異」や「五十歩百歩」と同じ気持を示している。

「大同小異」は、『莊子』にあつて、「細い点では違ふところがあるが、大体は同じだ」

(中古成362) ということである。「五十歩百歩」は、『孟子』にある話で、戦争で五十歩逃げて立ち止まった者が百歩逃げた者をたいへん臆病だとあざ笑ったとする。それを戦場で五十歩逃げても百歩逃げても、逃げたいという点ではどちらも卑怯で変りなくあざ笑う資格はない」ということから、「大差がない。似たりよったりでどちらも劣っている」(中古成214) という意味である。従って、“Things that are unlike can be of the same nature in themselves.” (違いがあっても本質的には同じである) という点で英語の諺も成語も同じ気持を示しているといえよう。

5. A stitch in time saves nine. (時を得た一針は九針の手間を省く)

この諺の精神は、“Don't spare yourself in your work now, because later it will be harder.” (今の仕事に労力を出し惜しみしてはいけない、手遅れになるとめんどうだから) で、中国の成語としての「毫毛斧柯」とか「禍は織織より生ず」(禍生自織織) とほぼ同じといえよう。

「毫毛斧柯」は、『戦国策』にあって、細い毛は弱々しいうちに切らないと斧を用いなければならなくなる、ということから「災いのもとはいさいうちに除去すべきである」(中古成201) ということである。

「禍は織織より生ず」は、『荀子』にあって、「大きな禍もごく小さい原因から起こる」ということから「わずかなこととっておろそかにしてはならぬ⁹⁹」ということである。この諺も成語も共に「手遅れを慎しめ」と教えている。

6. All's well that ends well. (終りよければすべてよし)

これは、“It is very important that any work has a good finish.” (どんな仕事も仕上りが大切) とか、“An enterprise is to be judged by its issue.” (事業は最後の仕上りによって判断すべきだ) ということであり、日本語の「仕上げが肝心」に相当する。

中国には、『易経』、『礼記』、『孝経』に「有終」がある。「有終」は、人は物事を始めるに当り、慎重に対処するが終りをおろそかにしがちである。そこで、終始一貫して物事をりっぱに成遂げることという。(中古成548)。この諺と成語は、正しく日本語にある「有終の美」の精神と一致する。

7. All that glitters is not gold. (光るものすべて金とは限らない)

ラテン語の “Non omne quod nitet aurum est.” (=Not all that shines is gold.) に由来する¹⁰⁰、この諺は “People and things that make a good show are not always as good as they seem.” (人や物が見かけがよいからといってそのとおりととは限らない) ということである。次に示す諺も同精神を示す。

“Appearance is deceiving.” (外観は人を欺く)

“Appearances are deceptive.” (外観は人を誤らせる)

“The cowl does not make the monk.” (頭巾のついた法衣が僧侶にしない)

“You can't judge of the horse by the harness.” (馬は馬具では判断できない)

さて、これらの諺に似た精神の中国の成語には、『揚子法言』に「羊質虎皮」や『塩鉄論』に「毛を見て馬を相す」(見毛相馬) がある。

「羊質虎皮」は、「羊質虎皮見豹則恐」に由来し、「外見がりっぱで実質の伴わない」(中古成552) ことである。「毛を見て馬を相す」は、その人のことばだけを聞き、様子を見るだけ

で能不能を判断して登用するのは、馬の毛並みの善し悪しだけでその良否を判定するのと同じで、正しくその内容にいたるまで見とどけていないこと、即ち、「表面だけで判断するのは間違いが多い」(中古成176)ということである。従って、英語の諺も故事も、外見と中身の不一致をして「見かけだおしに注意せよ」と教えている。

8. Bad news travels fast. (悪い知らせは速く伝わる)

この諺は、“Ill news travels fast.”、や“Ill news comes apace.”ともいわれ、米国には、“Bad news always come too soon.”というものもある。要は、“An evil deed and rumor often spread rapidly.”(悪い行いやうわさは瞬間に知れ渡ってしまう)ということである。

中国の成語としては、『北夢瑣言』や『伝燈録』にある「他人の善行はおおい隠し、他人の悪事はあばきたがるのが世の中のならいであるから、善行はなかなか知られないものだが、悪事はたちまち千里の遠方までも広まるものだ」ということから、「悪いことをするとすぐに知れ渡る」(中古成15)という意味の「悪事千里を行く」(悪事行千里)がある。元々悪事は非常な勢いではびこるもので、そのことをよく表わしている成語に、「燎原の火」というのがある。これは、『書経』にあって、「火が野原に燃え始めると、大きく燃え広がって近づくことも撲滅することもできないようである」ということから「悪事などが非常な勢いではびこるたとえ」(中古成571)である。なお、「燎原の火」には、「悪事や世の中の乱れが広まるさま」や「敵を次々に撃破して進んだりするさま」(中古成571)の意味もある。また、この諺の反対を示すものに、“Good news goes on crutches.”(よい知らせは松葉杖をつけて行く)がある。これに相当する成語は、「善行についての評判はとかく世に伝わらぬもの」(故こ324)という意味の「好事門を出でず」(好事不出門)といえよう。

9. Birds of a feather flock together. (同じ羽をもった鳥は群がる)

この諺は、“People of the same character associate together.”⁹⁹(同じ性格の人たちは仲間になる)即ち“People who have things in common get together.”(共通のものを持っている者は集まる)ということである。また、Ciceroの*De Senectute* III. vii.にあるラテン語の“*paes autem vetere proverbio cum paribus facillime congregantur.*”(=according to the old proverb equals most easily mix together.)やHomerの*Odyssey*のxvii, 218.にある“The god always brings like to like.”の意のギリシア語に由来するともいわれる“Like will to like.”⁹⁹の他に“Like attracts like.”も同じ精神の諺である。これらと同じ精神の成語として『易経』に「類を以て聚まる」(以類聚)がある。これは「多くのものが仲間によって集まり、群れによって分かれ、吉と凶とが生じてくる」ということから「似た者同士は自然に集まる」(中古成581)ということである。また、これは一般に「類聚」ともいわれる。

10. Dangers are overcome by dangers. (危険が危険によって打ち負かされる)

この諺の精神は、“A bad man is used in getting rid of a man as bad as he is.”(悪人を使って悪人を除く)である。米国では、“Dangers are conquered by dangers.”⁹⁹といわれる。また、同じ精神を示す英語の諺に、“A hair of the dog that bit you.”(君をかんだ犬の毛)や“Like cures like”(同種物は同種物で治療される)などがあるが、“Diamond cut diamond.”にも相通ずる気持が含まれる。

中国故事としては、『普燈録』に「毒を以て毒を制す」(以毒制毒)がこの諺に相当しよう。これは、「仕掛によって仕掛を奪い、毒によって毒を攻める」ということから「逆効果を利用する。毒薬を用いて解毒作用をはかる。悪人を使って悪人を取り除く」(中故成436)ということである。英語の諺もこの成語も「悪」の善用の点で全く同じ気持を表現している。

11. Do to others as you would be done by. (して欲しいと思うように人につくせ)

この諺は、*Luke vi, 31.* にある “As ye would that men should do to you, do ye also to them likewise.” (自分にしてもらいたいことを望むとおり、そのように人にしてあげよ) に由来する。精神は、“We should not behave towards others in a manner they would not like us to behave towards them.” (人が望まないことはしてやってはいけない) であり、正に論語にある「己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」(己所不欲、勿施於人) に相当する。また、中国故事として『大学』に「絜矩之道」(絜矩之道) というのがある。これは、「絜」が「量る」を、「矩」が「さしがね」を意味し、絜矩は「さしがねで計る」ことで、「道」は「やり方」のこと、「自分の心を基準として他人の心を押し量り、相手のいやがることはせず、相手の好むことをしてやるやり方」即ち、「人を思いやって正しい道に向かわせる道徳上のり」または「思いやりの道」(中古成174) のことである。従って、この諺も成語も「思いやり」を教えている。

12. Don't teach your grandmother to suck eggs. (祖母に卵のすい方を教えるな)

この諺は、“We need not explain one thing or another to a person aware of the world.” (知りつくしている人に説明する必要はない) ということで、日本の諺にある「釈迦に説法。孔子に論語。孔子に悟道、河童に水練」と同精神を示す。英語には、“Don't teach fish to swim.” (魚に泳ぎ方を教えるな) という同意の諺もある。同意の中国の成語としては、『詩経』に「猿に木登り」とある。これは、「猿は木に登ることの巧みな動物だから、これに木に登ることを教えるようなことは必要ない。また、猿の性はよく木に登るが、もしさらに木登りを教えれば、他に優れて上達すること」と、二つの考えがある(中故成237)。このことことから、「むだなことをする。よく知っていて教える必要のない者に対して教える。人に皆仁義の心があるが、もしこれを教えれば必ず進む。悪を成就させるたとえ。」(中故成237) の意となった。従って、いずれも「さしでがましいことはする必要がない」と教えている点で精神が一致するといえよう。

13. Every miller draws the water to his own mill. (すべての粉屋が自分の水車に水を引く)

この諺は、“Everyone thinks of his own gain.” (だれも自分の利益のことを考える) ということで、“All men row galley way” (すべての人が船を自分の方にごく) もよくいわれる同意の諺である。同意の中国の成語としては『孟子』に「我が為にす」(為我) がある。これは、戦国時代の楊朱の思想で、他人も国も愛することを知らなかった、ということからの成語で、「自分の利益だけを考えて、人のことなど考えない」という当時の思想からも、「自己本位でわが利だけ計って人の利益を顧みないこと」(中故成594) である。この語と成語は、「我田引水」をよく表わしている。現代では、“Many of us think only of our own convenience.” (自分のことしか考えない人が多い) で嘆かわしいだけに、人間社会には、“Live and let live.” (共存共栄) という諺にある通り、自他共により良く生きようという

姿勢が大切である。

14. Good wine needs no bush. (良い酒には看板が必要ではない)

この諺は、“What is good in quality does not need to be advertised.” (よい品物には広告は不必要だ) という釈義から、“A man of virtue does not have to speak eloquently, for his character submits itself to him.” (徳のある人は弁舌を用いなくても良い評判がつき従う) という精神を示す。これに相当する成語は、『史記』にある「桃李言わず下自ら蹊を成す」(桃李不言下自, 成蹊) に相当しよう。これは、「桃や李の木が人を招くようなことは何も言わないけれど、花も美しく実もなるので、その木の下に自然に人が集り、小道ができてしまう」という故事から「りっぱな人格者のまわりには、自然に人がより集ってくる」(故こ664) というのである。これを単に「成蹊」ともいう。なお、桃や李の花は、「不言の花」といって「人徳のある立派な人」のたとえにもなっている。また、この‘bush’については、“A bunch of ivy was formerly the sign of a vintner's shop.”¹⁰⁾ (つたの束は以前、酒屋の看板であった) といわれるように、この諺は、“Good wine needs no ivy bush.” ともいわれる。

15. Keep your shop, and your shop will keep you. (店を守りなさい、そうすれば店が君を守るでしょう)

この諺は、“If we always work hard, we will not fail in life.” (一生懸命働いていれば、落ちぶれることはない) の意味で、日本語の「稼げば身立つ」とか「稼ぐに追いつく貧乏なし」に相当する。“Diligence is the mother of good luck.” (勤勉は幸運の母) や “Money begets money.” (金が金を生む) も同じ気持を示す諺である。同意の中国の成語としては、『説苑』にある「力は貧に勝つ」(力勝貧) がある。「力」は、「つとめる、励む」ことで、全体としては、「一生懸命働けば貧乏から逃げられる」(中故成381) というのである。従って、いずれも「労働」を奨励している。

16. Many a little makes a mickle. (塵も積もれば山となる)

この諺は、スコットランドでは、“Many a mickle makes a muckle.”¹¹⁾ といい、「節約」を奨励し、“If only you make a constant efforts, you will do great work.” (努力を続ければ、大きい仕事をする) というこで、‘Constant dropping wears the stone. (絶えず水がしたたり落ちると、石をすり減らす) という諺とも同意といえる。同意の中国の成語として『漢書』には、「点滴石をも穿つ」(点滴穿石) や「叢軽、軸を折る」(叢軽折軸) がある。前者は、「点滴」は、「あまだれ」のこと。屋根から落ちる雨だれは、微力なものであるが、長年にわたって軒下の石に当たっていると、ついにはそれをえぐって穴をあけてしまう、ということから、「根気よく努力をつづけると、大きな仕事をやりとげる」(中故成419) というこである。後者は、たくさん集めた軽いものでも、積んで多く集めれば、ついには車の軸を折るようになる、ということから、「小さなものがたくさん集り大きな力を発揮する」(中故成340) というこである。この諺と成語は、根気強さを教えている。

17. Murder will out. (殺人は必ずばれる)

この諺は、“Wrongdoing cannot be hidden for ever.” (悪事はいつまでも隠し通せない) というこで、「悪事は露見する」といわれる。『老子』にある「天網恢恢疏にして失わず」(天網恢恢疏而不失) に相当しよう。これは、天の網は大きく目はあらいが善悪の報い

は見逃すようなことはない、ということから、「悪事には、遅かれ早かれ、天罰がある」(故こ657)ということである。また、『後漢書』にある「四知」を思わせる。これは、後漢の楊震に推挙されて役人になった王密が、夜中にこっそりと賄賂をもってきたときに、揚震が、「天・地(或は神)・相手・自分の四者が知っている」と秘密に事を行っても必ず露頭するものだと戒めた故事に基づき、「悪事は隠していても、いつか必ず露頭する」(中故成256)ということである。

次の英語の諺も同じ心を表わす。

“The mills of God grind slowly.” (神の碾臼はゆっくりと粉をひく)

“God’s mill grind slow but sure.” (神の碾臼はゆっくりと確実に粉をひく)

これらに対して、正しいことはやがてわかると教えるものに、“Truth will out.” (真相はあらわれる)という諺がある。

18. Paul’s will not always stand. (セント・ポール寺院はいつもあるとは限らない)

この諺の ‘Paul’s’ は ‘St. Paul’s Cathedral’ のことである⁴⁾。従って、地上の万物は流転することをいう諺である。すなわち、“Everything changes in the world.” や “All things in the world flow.” ということである。また、ギリシアの Herakleitos (544-484B.C 哲学者) は、‘*παντα ρει*’ (=万物は流転する) といっている。同意の成語としては、『古文真宝後集』に「天地は万物の逆旅」(天地者万物之逆旅)がある。「逆旅」は、「旅人を迎える宿屋」のことで、この天地の間は、あらゆるものを宿すところの旅館である。天地というものが永遠の存在であるのに対して、人間を含めた万物のはかなく、うつろい易いことを表わすことばである(中故成418)。この諺と成語は、「万事のはかなさ」を表現している。

19. There is no accounting for tastes. (好き嫌いは分らぬもの)

この諺は、“A version of the Latin tag.”にある “*de gustibus non est disputandum* (= there is no disputing about taste)”⁵⁾に由来する。この諺は、“We like what we like, and dislike what dislike. Such are our propensities.” ということで、“Every man to his taste.”, “Everyone to his taste.” や “Tastes differ.” などと同精神の諺である。『楚辞』にある「蓼虫、葵菜に徒るを知らず」(蓼蟲不知徒乎葵菜)がこの諺と共通する。これは、蓼の辛い葉を食べる虫は甘い葵の葉に移ろうとしない。自分のいる所に満足して他に移ろうとしないのが人情である、ということから「人の好みはすぎずきである」(中故成573)ということである。この点が、この諺と成語は同意である。成語の方には「悪人がなかなか善を行うようにならない」という意もある。なお、この英語の諺は、「蓼食う虫もすぎずき」といわれている。

20. Time is flies. (時は飛ぶように過ぎて行く)

この諺は、ラテン語の ‘*Tempus fugit.*’ = (Time flies.) に由来し、“How fast time passes!” ということである。『礼記』の「駟の隙を過ぐるが若し」(若駟之過隙)とか『陶淵明』の「歲月は人を待たず」(歲月不待人), また『莊子』の「白駒の隙を過ぐるが若し」(若白駒過隙)等を思わせる。「駟の隙を過ぐるが若し」の「駟」は、「四頭立ての馬車」のことで、古代中国では乗り物として最も速力の速いものとされ、駟が壁や戸の透き間ごしに見えるほんのわずかの距離を通り過ぎることから、「年月がたちまちに経過すること」(中故成259)にいう。「歲月は人を待たず」は、「時は人の都合にかかわりなく刻々と過ぎて

行く」(故こ373)ということ、「白駒の隙を過ぐるが若し」の「白駒」は、白い馬、駿馬。「隙」は、「すき間の孔」のこと。人間の一生は、白い馬が壁のすき間の向こうを走り過ぎるのがちらっと見えるように早く、また短いものだ、ということから、「月日や時間の過ぎ去ることの非常に早いとえ、人生のはかないたとえ」(中故成470)である。従って、日本語の「光陰矢の如し」と同意である。月日は、まさに、李白(701—762)のいう「百代の過客」である点で、英語の諺の“Time and tide wait for no man.”(時間は人を待たぬ)とも全く同じ精神を示す。

(3)

英国と中国とは、近代に至るまで、互いに隔絶されてきたといつてよいほど、民族、宗教、俗習、言語、広く文化といった点で異色異質の国同士であった。しかし、この論稿でみたように、両国の諺や故事を照し合わせてみて、それが何を教え、何を戒めているかという点で、かなり相通ずるものがあることが知られるのである。これは、まことに異中の同というべきところである。

今ここにいう異中の同の異に視点をおき、両国語の表現の「異」を採り上げるなら、興味ある比較がなされるように思う。例えば、‘All that glitters is not gold.’(光るものすべて金とは限らない)に対し、中国では、「羊質虎皮」(No. 7)といい、“Dangers are overcome by dangers.”(危険が危険によって打ち負かされる)には、「毒をもって毒を征す」(No. 10)。“Good wine needs no bush.”(良い酒には看板は不必要)には、「桃李言わず、下自ら蹊を成す」(No. 14)、“Don't teach your grandmother to suck eggs.”(祖母に卵のすい方を教えるな)には、「猿に木登り」(No. 12)などのように、表現に用いられる比喩の仕方、登場する人物、動植物、その行動、またそこに用いられる品物などに、西欧的なものと中国的なものとの相異がうかがわれるように思う。

さらに興味あることは、表現形式の異なり方がせばめられているか、なかにはほぼ同じものになっているようなのが見られることである。例えば、“A miss is as good as a mile.”(一吋も一哩も、はずれはずれ)と「五十歩百歩」(No. 4)、“All is well that ends well.”(終りよければすべてよし)と「有終(の美)」(No. 6)、“Do to others as you would be done by.”(して欲しいと相手が思うことをなせ)と「己の欲せざるところ、人に施すこと勿れ」(No. 11)、“Time and tide wait for no man.”(時間は人を待たない)と「歳月は人を待たず」(No. 20)などがそれである。これらの互いに対応するものの音声、字体、辞句、言語構造の「異」を棚上げすれば、思想、語義は一致しているといつてよい。

一般的表現と特殊表現をとるものに、“There is no accounting for tastes.”(好き嫌いは分からぬもの)に対する「蓼虫、葵葉に徒るを知らず」(No. 19)、“Time flies.”(時は飛ぶように過ぎて行く)に対する「駒の隙を過ぐるがごとし」(No. 20)といった例がある。これは、抽象的認識と具体的個別的把握の差というべきであろうか。

拾いあげたこれらのわずかの例は、数多の中の一部にすぎないが、表現の様式、用語、名辞の中に、西欧と中国の民族性、知恵、思想、習俗、生活、ひろく文化が必ずその影、形をちらつかせている。恰も中国の成語「囊中の錐」の如く、それは現れずにはおれないものである。それらの異同を探る諺研究を今後の研究課題としたい。

(注)

- (1) 藤江在史『ことばから見た中国』(自治日報社, 昭46) p.464.
- (2) *Proverbs*, ed. J. Glusky (Amsterdam: Elsevier Publishing Company, 1971) p. 7. 本稿のドイツ語, イタリア語, フランス語, スペイン語の各諺は, 本書による.
- (3) 『ことばから見た中国』 p.471.
- (4) 同書, p.470.
- (5) *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, ed. F.P. Wilson (London: Oxford University Press, 1970) p.840. (以下 ODEP と略記)
- (6) *Loc. cit.*
- (7) *American Saying*, ed. H.F. Woods (New York: Perma Giants, 1950) p.41.
- (8) *Sanseido's English Proverbs*, ed. Takanobu Otsuka & Seizo Takase (Sanseido, 1976) p. 67.
- (9) 拙著『英語諺解釈』(学書房, 昭57) p.22. 本稿の諺の釈義は本書による.
- (10) 加藤常賢・水上静夫『中国故事成語辞典』(角川書店, 昭54) pp. 23-24 以下, 同書の中国故事成語についての説明の引用は()中に中故成と頁数で示す.
- (11) ODEP, p.224. にギリシア語 "τά γ' ἀρκούνθ' ἱκανά τοις σώφροσιν." (足るだけあれば賢者には十分である) に由来するともある.
- (12) *The Concise Oxford Dictionary of Proverbs*, ed. J.A. Simpson (London: Oxford University Press, 1982) p.87. (以下 CODP と略記)
- (13) 貧苦の中で, するどい着想のやや暗い五言古詩をつくった唐代の詩人で, あざ名は東野という.
- (14) CODP, p.152. また ODEP, p.535. には, 以前はこのいい方であったとある.
- (15) *A Dictionary of American Idioms*, ed. Adam Makkai (New York: Barron's Educational Series, Inc., 1975) p.227.
- (16) 鈴木棠三・広田栄太郎編『故事ことわざ辞典』(東京堂出版, 昭45) p.978. 同書の中国故事成語についての説明の引用は()中に故こと頁数で示す.
- (17) CODP, p.92.
- (18) *Ibid.* p.20.
- (19) *Ibid.* p.133.
- (20) *Dictionary of American Proverbs*, ed. David Kin (New York: Philosophical Library) p.63.
- (21) CODP, p.99.
- (22) R. Ridiout & C. Witting, *English Proverbs Explained* (Heinemann, Educational, Books Ltd., 1974) p.107.
- (23) ODEP, p.614.
- (24) CODP, p.1.

(本論は, 昭和58年7月2日, 福井大学において開かれた中部地区英語教育学会福井大会で発表した拙稿を改題し加筆したものである.)